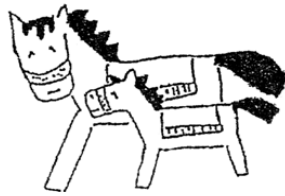


♪
お馬のかあさん
やさしいかあさん
子馬をみながら
ぽっくりぽっくり
あるく

おうまのおやこ

子育ても
あせらず待ちましょ
ポックリ、ポックリと

26年 8月 NO. 237



〒 760-0044 香川県高松市御坊町2-2
高松保育園内地域子育て支援センター
TEL:087-821-9347 FAX:087-851-0857
<http://www4.ocn.ne.jp/~kouma/>

(厚生労働省・高松市委託事業)

～どなたでも～		8月の主な活動		～お気軽にどうぞ～
8月 9日	土	体験保育 10:00～11:30	同じ年齢のクラスに入って あそびましょう。	
8月 22日	金	おはなしの会 10:00～12:00	「みんなで夏をがんばろう」をテーマに 絵本や詩、まき絵などを楽しめます。	
8月 23日	土	地蔵盆において 17:00～20:00	縁日・盆踊り・人間劇や花火など 盛りだくさんです。当日券も販売します。	
8月 27日	水	健康育児相談 11:00～12:00	園医師（小児科医）にゆっくり相談できます。 (要予約)	
8月 28日	木	香川みすゞさんの会 14:00～16:00	元高松市副市長、現NPO法人スローライフ代表 岡内須美子氏に「子育てしやすい街づくり」に ついてお話いただき、フリートークします。	
8月 30日	土	体験保育 10:00～11:30	出産予定の方も 子育て体験においでください。	
8月 30日	土	脳力いきいきアート 14:00～16:00	そっくりに描くことから解放され、心の自画像を 描きましょう。ハガキ以上の大きさの鏡をご準備下さい。	

・火～土の13時～16時までは、園内開放しています
ので、親子でご来園下さい。
(但し、月・日曜・祭日は休み)

育児相談（月～土）9：00～18：00

しつけや子育てについての悩み、保育園生活
入園・見学についての相談もどうぞ。

香川県高松市御坊町2-2
高松保育園 地域子育て支援センター



金子みすゞ童話全集③
空のかあさまより

も納
う屋
近の
いひ
ささ
しが

まき
また
お日
それ
お日
また
伸び
る。

か
さ
み
西
さ
か
ん
が
が
し
あ
ぐ
ね
て

さ
ど
が
こ
へ
す
が
る
と

朝
垣
か
が
ひ
く
う
て
朝
顔
は、
朝
顔
の
蔓
つる



今月は、お寺の副住職として布教活動され、お母さんでもある川田慈恵さんより、ご自身の子育て体験について原稿をいただきましたので、ご紹介しましょう。

「おうまのおやこ」

川田 慈恵

数年前のある日のこと、私は朝から自室の机に向かい、頭を抱えていました。ある寺院の季刊誌に載せる法話のご依頼をいただき、原稿を考えていたのです。聖典を開き、諸先生方の本を読み、書いては消し、書いては消し、気が付くと昼ごはんを食べるのも忘れ、何時間も机に向かっていた。その間、何度も当時小学校に上がったばかりの息子が部屋にやってきては、声をかけてくれます。「お母さん、何してるの?」「お母さん、みかんどろそ」「お母さん、僕、絵を描いたよ。見て!」なかなか思うように原稿が書けずに焦っていた私は、はじめは返事をしていたものの、だんだんうわの空になり、生返事。しまいには「お母さんは今、大事な勉強してるからあとにして!」と言う有り様でした。息子を追い出し、日が暮れる頃になって、ようやく原稿が完成しました。苦労した原稿ができあがり、ほっとして心が軽い私の前で、夕食の席についた息子の顔はふくれっ面。「どうしたの?」と尋ねると「お母さんは今日、仏さまの勉強をしていたの?」と息子。「そうだよ」と答えると、ふ〜んと言ったまま口数少なく食事を済ませると、「お勉強をしているお母さんなんて、大嫌い!今日は僕のことを1度も見てくれなかったよ」と言って、2階へ駆け上がっていきました。夕食の片付けを済ませて自室に戻ると、机の上には「人の心に寄り添う」というテーマで書き上げた原稿の横に、息子の描いた絵と鮮やかなオレンジ色のみかんがひとつ、寂しそうに置かれていました。

聖典やご法話の中で胸を打つ言葉やハッとさせられる教えに出遭うことがあります。しかし、いい言葉だなあ、なるほどその通りだ、と感じ入りながら、その次には「よし、これを誰かに伝えよう」「この言葉は、あの人に聞かせたい」と思う私があります。その言葉を頭で理解しても、我が身のこととして聞けない私。「人が話をしている時には、こっちを見て聞きなさい」「呼ばれたら返事をしなさい」息子にいつも言っている言葉でありました。

2階に上がって、息子のところへ行き、声をかけました。「今日は、あなたと向かい合えなくてごめんね。自分のことに夢中になってしまって・・・」すると息子は「もういいよ。僕もよくやっちゃうから。お母さんと僕、親子だから」

らね」と笑って私の膝に座りました。

人の心に寄り添う、ということをお子の優しさに教えられた私でした。

(ちなみに私と現在小6のお子は、^{うまどし}午年の親子です。)

～プロフィール～

^{かわだ}川田 ^{じけい}慈恵 浄土真宗興正派 本山布教使 高松市妙楽寺副住職



次にご紹介するのは「^{ぼっすい}拔萃のつゞり その七十二」(^{くまひら}熊平製作所^{へんさん}編纂)からの一文です。この「^{ぼっすい}拔萃のつゞり」は、^{くまひら}創業者の熊平源蔵氏(明治14年生昭和53年没、現会長の祖父)が社会に感謝報恩の思いから昭和6年に創刊し、今年で73号になります。新聞・雑誌・書籍などから珠玉のエッセイ・コラムを^{ぼっすい}拔萃し、小冊子にまとめたものです。

私を支えてくれた人々

松瀬 久雄

生後10か月の頃、小児まひで歩けなくなった私は晩学になり、22歳で中学卒業と同時に佐賀県から大阪に来て時計職人になった。身障者職業訓練所の1年を経て時計屋に就職し、経験をかさねた。

修行中に知り合った女性と29歳で結婚し、大阪近郊の一隅に小さな時計屋を開いた。小さなままの店を妻と40年近く続けることができたのは、修理を主にしてきたのが幸이었다。体力があるうちにと、60代後半になって間もなく店じまいをした。閉店の日、私たち夫婦は長男長女の家族に囲まれて写真に収まった。子らからの花束を胸に抱いた妻は、ゼロからの出発だったねと微笑み、「頑張ったよね」との娘の言葉に頷く。妻の支えあつての独立開業であった。

私は佐賀県巖木(きゅうらぎ)町の小さな山里で、歩けないまま育った。諦めきれない母が久留米医大整形外科の医師に診てもらい、3か所の手術を受けて松葉づえで身辺の自由が利くようになったのは15の時。それまでの私は読み書きの練習をしたり、農家が同情で買ってくれる炭俵を編んだりして過ごしていた。生まれた時、実父は他界しており、私は母の連れ子だった。母よりずっと年上の継父は温厚な人柄の樵(きこり)だった。私を背負って歩いてくれる親父(おやじ)だった。

松葉づえで歩けるようになってから、県立障害者授産場で時計修理の技術を学べるのを知った。昭和31年の年明けを待って、私は町役場福祉課の原さんを訪ね、授産場入場願書を書いてもらった。2年ほど前から山間部にも乗合バスが通り、街中へも出られるようになっていた。

原さんは戦地で片腕を失っていた。町の障害者の世話もしている人だった。2月半ば、母に付き添われて授産場におもむき、入場選考を受けた。中学程度と説明された4科目の学力試験と手指の検査、そして面接。

10日後、不合格の知らせに泣く。入場資格の1つに義務教育終了または同等の学力を有する者、とあった。また役場に行き、原さんに学校に行けなかった悔しさを吐き、これからでも学校に行きたい衝動に駆られてることを話した。私の思いを察した原さんは、「よし、分かった」。私の顔を凝視して言ってくれた。この原さんの親身な尽力によって、この年、18歳の私は1学期の途中から6年生として町立小学校に特別入学させてもらった。

担任の田中政人先生から私のことを知らされていた6年2組のみんなは、拍手で迎えてくれた。体中が火照（ほて）った。真っ先に話しかけてくれた副級長の和美さん、ローマ字をおしえてくれる悟君、分数の計算を教えてくれる級長の政彦君、おなじ机の保馬君は宿題ノートを先生に運んでくれたり、私は級友たちに支えられて、すべてが新鮮な学校生活が始まったのだった。

中学に進んでできた級友たちも、教室を移動する時など気易く勉強道具を持ってくれた。クラス担任の若い道子先生は文学作品集やら私に持って来てくれるのだった。中学卒業50年目にして初めて開催される郷里での同窓会に、私は妻に付き添われて出席した。受付をしている女性たちが笑顔で迎えてくれた。径子さんが満面の笑顔で「まあ、久雄さん」と車いすの私の目線まで身を低くして歓迎の言葉をくれた。のっけから私は感激。「久雄君来るか心配していた」と佐世保への社会見学に強引に誘い、連れて行ってくれた和彦君。悟君、保馬君、昭久君と次つぎ寄って来てくれる級友たちに感激が募ってゆく。集まった同窓生80人と先生10人。級友たちも60代半ば、私は71に。乾杯の前に、私は胸に込み上げてくるものを堪（こら）えてマイクを持ち、人生を拓（ひら）く力を与えてくれた感謝の言葉をのべた。

（まつせ ひさお＝元時計職人・ラジオ深夜便「こころのエッセー入選作」）

